

アンドレ・モーロワ著「フランス敗れたり」を読む

- 国を守るとは何かを考える -

独りになってから、私は長い間、今の会話を色々と考えてみた。やがて私は鉛筆をとり出して、手にしていた本 —— それはバルザックの小説であったが —— のカバーに次のように書いた。

救済策 ——

強くなること —— 国民は祖国の自由の為にはいつでも死ねるだけの心構えがなければ、やがてその自由を失うであろう。

敏捷に行動すること —— 間に合う様に作られたる一万の飛行機は、戦後の五万台に優る。

世論を指導すること —— 指導者は民に行くべき道を示すもので、民に従うものではない。

国の統一を保つこと —— 政治家というものは同じ船に乗り合わせた客である。船が難破すればすべては死ぬのだ。

外国の政治の影響から世論を守ること —— 思想の自由を擁護するのは正当である。

しかし、その思想を守る為に外国から金を貰うのは犯罪である。

非合法暴力は直接的かつ嚴重に処罰すべきである —— 非合法暴力への煽動は犯罪である。

祖国の統一を攪乱しようとする思想から青年を守ること —— 祖国を守る為に努力しない国民は、自殺するに等しい。

治めるものは高潔なる生活をする —— 不徳はいかなるものであれ、敵につけ入る足掛かりを与えるものである。

汝の本来の思想と生活方法を熱情的に信ずること —— 軍隊を、否、武器をすら作るものは信念である。自由は暴力よりも熱情的に奉仕する値打ちがある。

ここまで書いた時、アドリアンが血の流れる指を差出しながら走ってきた。

「僕、自分で切ったんだ」と、少年は言う。「モーロワさんは繃帯の巻き方を知ってる？」

私は最善をつくして繃帯を捲いてやった。

P.183 ~ 185

アンドレ・モーロワ著「フランス敗れたり」ウェッジ 2005年5月27日刊

- 2006年10月16日記 -